

興味・資格などさまざまな側面から検査できる。最後はキャリアプランニングコーナーで、目先のプランだけでなく、キャリアパスや家庭のライフイベントを考慮しながら長期プランが設計できる仕組みだ。

動き出すきっかけづくり

鈴木さんは高校を卒業してから内装工の仕事に就くまで、アルバイトを転々としてきた。相談にあたったカウンセラーは、診断結果をみて、質問を投げかけた。

「いちばん良かった仕事はなんですか」
 「ガソリンスタンド」
 「どういふところが良かったのですか」

「ガソリン以外のサービスをお客に勧めて、売上げが上がる」ところ
 鈴木さんは、「あのとときの自分がいちばん生き生きしていたなあ」と思い返し、「自分は接客が好きなんだ」ということに気がついた。

相談の中で現在のリフォーム会社の仕事も、ガソリンスタンド勤務当時の客からの紹介だということがわかった。「仕事を紹介されたということはお客さんの信頼を得たということだから自信をもっている。これからも人の出会いや人脈は大切」と相談員が諭すと、「そういうのを人脈っていうんですか」と驚いた様子。意外な発見に、相談に臨む表情と姿勢が次第に変わっていった。

これは、実際に同センターで相談専門役を務める生島晃子さんが扱ったケース。相談者の多くは、自分には能力

がないと思いついて入っている。とくに若い人は、「フリーターには未来がない」と言われ、不安と焦りを感じていることが多い。

「アルバイト経験しなくても、そこで必ずなにかを身につけてきたはず」（生島さん）。ガイダンスでは、まず過去を振り返り、めざす仕事の方向を探る。経歴と希望の間にあるギャップはなにか。そのギャップを埋めるためにいまなにができるのか。相談者と一緒に考えを整理していくプロセスのなかで、インサイトによる適性評価は過去をひもとく大きな手がかりとなる。同時に、どんな結果が出て自分をもつめる機会にすれば「本人が動きはじめるきっかけになる」と生島さんは強調する。

「キャリア・インサイト」は七月、改訂版の販売を開始。新バージョンでは利用目的に応じてプログラムを選択できる「おすすめコース」が新たに装備された。時間をかけた人、エッセンスだけを経験したい人、就職準備状況にあわせて情報を入手したい人などのために七つのコースが用意されている。画面レイアウトや印刷機能の改良なども加えて使い勝手を高めた。

開発を担当した当機構の室山晴美主任研究員は、「インサイトは利用者自身に将来の方向を考えるきっかけや素材を与えるシステム。同時に、カウンセラーの相談に役立つ情報を提供することも可能」として、カウンセリングでの活用は効果的と話す。

（詳しい情報は<http://www.jil.go.jp/institute/seika/sites2000/osusume.htm>）

（調査部 高畑いづみ）

III OHBY 中高生向けの職業ハンドブックPC版

東京都立世田谷泉高校

ットが敷かれたL教室。三方の壁に向かつてぐるりと並べられたパソコンの前に、一年次の生徒二五人が座る。進路ガイダンスのためのツール「OHBY」は、パソコン版の『職業ハンドブック』（労働政策研究・研修機構発行）で、四三〇もの職業に関する職務情報を、中高生向けにわかりやすく解説したものだ。仕事の内容、実際の仕事をする人の映像、就職までの道筋、類似の職業、先輩の声——など仕事の全貌がわかる。情報の量質ともに他の追随を許さない。

先生が各班をまわって、挙げられた五つの職業をホワイトボードに書き出す。ファイナンシャル・プランナー、シュール・フィッター、クリーニング師、宗教家、競艇選手——。

「それじゃあ、ジョブタウンを開いてこの職業を探してみよう」
 メインメニューから「ジョブタウン」



「ジョブタウン」から仕事発見を始める

「ほかの班が見つけにくそうな職業を探して、班でひとつ挙げてみてくたさい」

六月七日夕、東京都立世田谷泉高校（生徒数六〇〇人）夜間の部で、職業ガイダンスシステム「OHBY」(Occupation Handbook for Youthの略)を使った進路学習授業が始まった。カーペ



世田谷泉高校の杉森先生

のコーナーに入ると、架空の町のカラーフルな立体地図が広がる。マウスが地図上を動かすと、九つのエリアが浮かび上がる——オフィス街、商業・学術・臨海港湾エリア、内陸工業団地、駅前商店街、住宅街など。エリアを選択し、病院や工場など建物をクリックすると、その場所に関連する職業の一覧がイラストで表示される。各職業の関連性が理解できるため、現代の産業・社会構造を把握しつつ、進路を考えることができる。

「先生、ファイナンシャル・プランナーが見つからない」。女生徒が、手当たり次第に建物をクリックしている。証券会社のなかに発見して「あれ、ここにあった」。

授業は次に「仕事発見テスト」に進んだ。このコーナーには興味テストと能力テストがある。二つのテストの総合的な評価によって自分の特性を知り、その特性にあった職業がなにかを見ることが出来る。

テストは興味・能力の程度を三段階で聞く。興味は、「機械や道具を使って製品を作る」「チームのリーダーとなってイベントを企画し実行する」な

どの質問に、「やりたい」「やりたくない」「どちらともいえない」から程度を選ぶ。能力テストでは、「与えられたテーマについて調べてまとめる」「算数や数学の応用問題を解く」などの質問が並び、「得意」「人並み」「不得意」から選択する。

個人で取り組む課題に移ると、クラスの大半は自分のパソコンに向かい黙々と作業しはじめた。質問をじっくり読み、いったん選んだ回答を変更したり、思案しながら次に進む。一方で、親しい友だちと二人で組み、ひとりがテストの質問を読み上げて相手の回答を入力するなど、おしゃべりしながら作業を進める生徒も少なくない。

テストの採点結果などは「マイノート」というコーナーにデータとして残すことができる。しかし、この日の授業では、テストの結果も適性職業の詳しい職務内容も、配布されたワークシートに書き写させていた。時間をかけて手書きしたものは記憶に残るからだろう。最後に進路学習の記録を保管する各自のファイルに、その日のワークシートも綴じ込まれた。この授業のように、生徒に興味をもたせ

るため、班別で互いに競い合わせるゲーム形式で進行させるのは有効な方法の一つかもしれない。しかし、この種のツールの利点は、教師の細かい指示がなくても、生徒が自主的に進めることができる点だ。

て二〇〇一年に開校した。午前、午後、夜間の三部からなる定時制高校で、時間割の組み方によって三年で卒業する者もいれば四年間じっくり学習する者もいる。

職探し はサーチライト式で

世田谷泉高校は、総合学科高校として

たといえば調理師。実際にこの職業に

就いてみれば、料理だけしていればよいではすまされない。伝票を整理したり、帳簿をつけたり、付随した業務が意外に多い。それはどんな職業でも同じだ。高校ではそうしたことを教えるければならない、と杉森先生は強調する。

自分が希望する仕事だけをやればすむという職業はない。逆に、他の職業のなかにも、自分に適した仕事が含まれているかもしれない。杉森先生は、「ピンポイント」のようではなく「サーチライト」のように仕事を探ることが大切という。

しかし、このようなことを教師が授業で教えても、生徒は実感できない。また、必ずしも教師全員がうまく伝えられない。杉森先生は「OHBYのようなツールを使えば、どんな教師でもある程度の成果があげられる」と語っている。

（調査部 高畑いづみ）

